

第 38 回(2010. 6. 10 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「亥は猪」

亥は、古代中国では「亥(がい)」で、「とざす」という意味があり、植物が枯れて実が成り、種ができて新しい生命が宿ることをさす言葉だったが、これを動物の猪をあてはめに当てはめて、人々に覚えやすいようにしたといわれている。中国や東南アジアの多くの国ではイノシシではなく豚を当てはめている。これは猪という字が中国では豚を表しているからであろう。

猪突猛進

猪は、分類学上では、牛と同じ偶蹄目だが反芻動物ではない。日本には二ホンイノシシと沖縄や奄美に生息するリュウキュウイノシシがいる。日本に棲む猪は大陸のものに比べて小さいというが、それでも体重が平均 100 kg もあって、大きいものは 200 kg を越える。植物の根や茎、葉とか果実を好んで食すが、蛙や蛇、あるいはミミズとか昆虫も食べる雑食性である。数頭から数十頭の群を作り、年に 1 回 4~5 頭の子供を産む。生まれたばかりの子供は、淡褐色の体で黄白色の数本の縞が水平方向に走っているから、通称「うり坊」とよばれて親しまれているが、この縞模様は 4~5 ヶ月もすると消えてしまう。

猪突猛進という言葉があるとおり、猪は猛烈な勢いでまっすぐ進み、急には曲がれないから、攻撃されたらひらりと身かわせばいい、などといわれてきた。また、武家社会では、考えもなくたまにまっすぐに突進する侍を「猪武者」といって、軽んじる風潮があった。しかし、実際には利口でしかも敏捷な動物である。時速 40~50 km で走り、足の蹄をうまく使って方向転換するし、1m 以上の高さを助走なしで飛び越える事ができ、また、20 cm くらいの間隙があればぐり抜けてしまう。鼻の力も非常に強く、農家が使う防御用の金網などは簡単に破ってしまうという。人間より早く走れて、しかも身体が柔軟な動物だから、あいつは猪のようなヤツだ、などと他人をバカにする言葉は間違いである。とかく人間は見かけだけで判断しがちなのだが、見かけだけで判断してはいけない典型的な例だ。だからといって、奇抜な風体をした若者が、いかに個性がどうの、中身が立派ならどうの、などといっても世間は通用しない。

東北から北海道にかけてはほとんど猪を見かけないが、青森県の山内丸山遺跡からは多量の猪の骨が出土していることから、昔は相当な数の猪が生息し、食されていたらしい。日本では仏教の伝来とともに、その影響から牛や馬あるいは豚など動物を食べる習慣がなくなったが、それでも猪とか鹿などは若干食べられていたようだ。江戸時代には猪は「牡丹鍋」といって、一部の庶民にとっては重要な動物性蛋白源だった。牡丹鍋の語源は、猪を煮込むと脂がちぎんで牡丹の花のようになるからとか、皿に盛った形が白い脂と赤い肉との彩りから牡丹と呼ばれるようになった、などといわれている。

旧暦の 10 月最初の亥の日は、田の神さまが去っていく日だ、と昔からのいい伝えがある。この日、人々は神棚にお餅や御神酒を上げて、この年の収穫を神さまに感謝する。猪は多産だから、これにちなんで無病息災、子孫繁栄を願った風習は古くから中国にあったが、それが日本に伝わって、1 年の収穫を感謝して餅を搗き、去っていく田の神さまに捧げてから餅やおはぎを食べるという行事になったものと思われる。このお祭りは、「亥の日」の「亥の刻(午後 9 時ごろ)」から、翌日の「子の日」の「子の刻(午前 1 時ごろ)」まで、田の神さまを見送って祝うものである。翌年も田の神さまがやって来て豊作になるように願って、干支の終わりの「亥」から始まりの「子」に基づいて、亥の刻から子の刻まで祭りが続いたのだ、という説もあるし、亥(い)と子(ね)からイネ(稲)に繋がるからだ、という説もある。この日は「開炉の日」といって、炬燵もこの日に出すものとされていた。

京都嵯峨野の愛宕神社では、旧暦で10月最初の亥の日には「玄猪祭」が行われていた。愛宕神社はホノムスビノミコト(火産霊命)を主祭神とした防火・防災の神社だからである。また、猪に乗っている摩利支天の像があるが、猪は摩利支天の眷属だからで、亥の日が縁日である。珍しいのは和氣清麻呂(わけのきよまる、733~799)を祀った京都護王神社の「狛犬」が猪である。これは、平安時代に和氣清麻呂が道鏡(どうきょう)の皇位継承に反対して大隅に流されるのだが、道鏡の意を受けた者たちが襲いかかると、猪の群が現れて襲撃者たちを追い払ったという故事にちなんでいる。

豚と猪

豚は猪を家畜して作られた動物だともいわれている。『古事記』には「猪飼」という言葉が出てくるから、かなり古くから家畜化して飼育されていたものと思われる。奈良平安のころ、「猪飼部」というところがあって、朝廷に献上する豚を飼っていたという。豚の肉は貴族の食べ物だったと思われる。自分の子供を卑下して「豚児」という人がいる。また、女性を「座敷ブタ」とか「白ブタ」などと侮蔑する人もいるが、豚は高貴な人の食卓に上ったものだから、豚に対してとんでもなく失礼な話である。

中国では、単に「猪」は、「豚」の意味である。猪は野猪と書く。たとえば、西遊記で有名な「猪八戒」は、天の川を管理する水軍の將軍だったが、女癖が悪く、酔った勢いで月の女神に強引に言い寄ったため天界を追われて地上に落下し、誤って雌豚の体内に入って黒豚の妖怪になった。その後、観音菩薩の慈悲により「猪悟能」という名前をもらって玄奘三蔵法師のお供にさせてもらった。ちなみに、猪八戒という名前は玄奘三蔵が付けた名前である。つまり猪八戒は豚であって猪ではない。余談だが、猪八戒が不老不死の果実を知らないで食べたことから、「豚に真珠」ということわざが生まれた。また、猪は湿地に転がって全身に泥を塗る習性がある。防虫のためだという説があるが、この湿地を沼田場(ぬたば)と呼ぶ。苦しくて転げまわることを「のたうちまわる」というが、この「のた」は「ぬた」が訛ったものだといわれている。ただし、盃を「猪口(ちょこ)」というのは、形が猪や豚の口に似ているからだという説もあるが、これは信憑性に欠けるようだ。また、生意気な奴を「猪口才な奴」というのも猪口や猪や豚とは関係がない。本当は、ちょこちょこするから「ちょこざいな」というらしい。

豚肉はよく火を通せといわれてきた。豚には有鉤条虫がいるからだというのが理由だった。条虫というのは、「サナダムシ」と呼ばれる「きしめん」のような寄生虫で、時には腸の中で10m以上になる。とかげのしっぽのように、切れたら再び伸びてくる非常に厄介な寄生虫である。中でも頭部に鉤のようなものを持つ有鉤条虫は、腸壁に引っかかってなかなか出てこないから、下手に駆虫薬を飲むと虫より先に肝臓がやられてしまう。雲竹斎は、中東勤務の際にこの条虫にやられた。アラックという強烈な酒を飲んだ翌日、虫は目を回したのか尻の穴から出てきたので、その時雲竹斎はあわてず騒がず、ゆっくりと割り箸に巻きつけて取り出したことがあった。現在の日本では条虫だけでなく回虫などの寄生虫もほとんど見かけない。医師、看護師など医療従事者も現物を拝んだことがある人も少なくなったという。寄生虫のような人間は多く見かけるのだが

余談だが、春は花粉症に悩まされる人も多いが、寄生虫が体内にいる人は花粉症にかからないという説がある。雲竹斎は幸か不幸か花粉症にはかからない。だから、そういった説を唱える知人の医師や学者の前では、「いやぁ～花粉症で毎年治療代がかかってまいっていますよ」などと、雲竹斎が不衛生な途上国に永くいたから寄生虫を飼っているだろうと疑われないように、ウソをつく。

豚は沖縄料理には欠かせない食材だが、一般的には牛肉の方が高級感があるらしく、どうしても人気は牛肉には及ばなかったようだが、「牛海綿状脳症(狂牛病)事件」が相次いだため、牛肉の消費量が激減して豚肉の消費量が急上昇した時期があった。「喉元過ぎれば熱さ忘れる」の諺どおり、現在は牛肉の売れ行きが回復しているようだが、今後またどうなることやら。この豚肉も牛や鶏同様にブランドがある。しかし、このブランドといわれている豚は、飼育環境や餌にこだわり、実際にはブランド豚肉が美味しいとは限らないようだ。スペインで食べたイベリコ豚の生ハムも、イタ

リアで食べたパルマ産の生ハムも、中国で食べた金華ハムも、特別美味しいというほどでもなかった。明治以前の、人間にブランドがあった時代は終わったと思ったら、食べ物にまでブランド物が出てきた。日本人は本当に「ブランド」が好きである。「ブランドでない人はブランドにあこがれ、ブランドでない人を憐み、優越感を感じる貧しい人」なのだといった人がいる。含蓄のある言葉だ。

猪の話から脱線して食べ物話になってしまった。雲竹斎は「食通」と称する気障な人間ではないが、食べることは昔から大好きである。戦中生まれで戦後日本が貧しくて育ち盛りに口なものを食べなかったせいだろうか、歳をとれば食べることにしか生き甲斐がないのだろうか、悪口雑言をいう輩もいるが、正直なところ「あたらずとも遠からず」である。そこで、十二支の動物にまつわる話も一巡したことでもあるし、次回から日本人の食文化に触れてみたい。